
約束 2 ～ 白鬼の世界 ～

六文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束2〜白鬼の世界〜

【Nコード】

N3622G

【作者名】

六文

【あらすじ】

死の星となった地球に独り残された少女日野凜彼女がその力を暴発させた中、降り立った地は戦の絶えない混乱の世界であった。そこで、出会う銀色の髪と隻眼をもつ青年。彼は凜の知りえない、ある答えをもっていた。約束第2部連載開始！！

第1話：襲撃

雪の酷い日だった。

「ごうごうと窓に雪がたたきつける。」

「今日はみんな中でおとなしくしていることだ。」

「そう言われて、作業は一旦中止。」

今はイエルとリュウラとトランプをしている。

「凜！ずるいよ！さっきから一人勝ちばかり！」

「勝負事は何事も本気でしようって決めてんねん。」

「大人げねえ・・・」

「一言多いよイエル君。」

わしゃわしゃとイエルの髪をかきまぜる。

のんびりとしていたその時だった。

「お頭！！八人衆が！！」

「なに！？」

「どうしたんだろうね？」

リュウラが不安そうにこっちを見てくる。

「俺、聞いてくる」

「あつもう、男口調はやめにするって言ったのに！」

「ごめん、ごめん。」

「凜ねえ、早く戻ってきてトランプな！」

イエルがトランプを持っている手を振った。

「うん」

そう言いながら、子供部屋のようになっているここを出た。

部屋の外は少し、騒がしくなっていた。

「近づいてるってか？」

「ああ、こっちは武器があるとはいえ・・・。」

「おやつさん！」

「ああ、凜」

おやつさんはこっちを振り向いた。

「決して、外にでんじゃねえぞ」

「何がおきたん？」

「八人衆の一人がこっちに向かってるらしいんだ。

たぶん食料狙いだろ。」

最近、ここの情勢も悪化してるからな」

「どうすんの？」

「とりあえず、逃げる準備はするけど、まにあわへんかもしれんから、武器の準備も一応しとく。」

戦に巻き込まれた。

今、初めてそう実感した。

向かってきているのは八人衆の一人だ。

危険

そう頭の中で認識された。

「イエルとリュウラを見といてくれ。」

「わかった。」

凜は急いで、イエルとリュウラのいる部屋を目指した。

「あれっ、イエルは？」

「凜ねえ戻ってきちゃったの？」

イエル、さっき凜ねえさがしに行っちゃったの」

「あちゃ・・・」

思わず額に手をあてた。

「イエル、探しに行ってくる」

「うん」

「リュウラはそこから出ちゃあかんで。

なんか、八人衆がこっち襲撃しようとしてるらしいねん」

「えっ珍しいね。

ばれたんだ」

「前にもあつたん？」

「八人衆じゃないけど場所がばれて、ちょっと面倒なことになったの。

あたしはちいちゃかったから覚えてないけど」

「そっか」

凜はそれを聞いて、すぐに部屋をあとにした。

船内は広い。

間違つて、変なところに行つてないといいのだけれど・・・。

凜は船内を力を使いながら、さぐりつづけた。

しかし、この力は人がいることを示してくれても、人を特定できるわけではない。

外に人を感じた。

「イエル！！」

「凜ねえ！！」

吹雪はやんでいた。

さくさくつとイエルが走りよってくる。

「外に行つちゃあかんで」

「でも、凜ねえまだ船内覚えきれてないでしょ」

凶星だったので、すこし言葉に詰まった。

そうだ数ヶ月は経ったのだが、間違つて外に出てしまったのは何度かある。

この力もそのときは役に立たない。

自分は生粋の迷子のような。

「だから、また外にでちゃったのかなって」

「そっか、でも急いで船内に行こう。」

さつき八人衆の一人が襲撃にくるって聞いたねん」

「うわっ、危ないね。それっ」

イエルは慌てて船内に入ろうとした。

その時、前方に不穏な人の気配が感じられた。

おかしいと思って、地面に手を置くとさらにくわしく伝わってきた。

たくさんの人が少し離れた場所で走っている。

もう、ここまであと少しだ。

「イエル。ちよっと捕まってて」

「えっ！？うんっ・・・！」

イエルはぎゅっと凧の袴の裾を握った。

厚手のブーツのかかとで、地面を蹴った。

すぐに船内の船長室に着いた。

「お頭！！」

「どうした、凧！」

「すぐ側まで来てる！」

かなり大勢！」

「もうそこまで来てたのか！？」

お頭はすぐに司令室のほうへ向かった。

「ありがとよ」

お頭の友達がぽんと凧の頭をたたいていった。

「イエル。こっから船室には戻れるね？」

「うっん・・・？」

凧は首を傾げているイエルをその場に残し、また外に出た。

この力・・・皆を守るために使う。

外は少しだけ、雪がふぶいていた。

第2話：白鬼（前書き）

人によりますが、少々残酷なところがありますので、了承ください。

第2話：白鬼

青年がいた。

血溜まりの中に青年はいた。

鬼

鬼

鬼の子！！

くくっ

くくっ

青年は笑っていた。

幼い頃の深い傷が青年の心を戦とともに狂わせてしまったのだ。

血が欲しい

喉が渴いて仕方がない

血をちょうだい

それを飲んだら、すこしは温かくなるんだ

だからちょうだい

あはははは

青年は血を浴びながら笑い続けた。

「来る・・・」

飛行船は少し離れている。

後ろの方でだんだん船内の人達が出てきているのがわかった。

「凜！？」

おやつさんが叫んでいた。

「どれくらい戦力になるかわかんないけど、戦わせてー！！」

凜は振り向いて、声を張り上げた。
雪が少しだけ降ってきた。

馬のひづめの音は聞こえない。

どうやら自分達の足で攻めてくるらしい。

「来るなら来い・・・」

凜は両手に力をこめた。

あたたかな感じが手の平から感じられる。

眼前に銀色が見えた。

ものすごい勢いでこっちに向かっている。
少し離れた後ろから軍勢も向かっている。
銀色はなぜか私の鼓動を大きく鳴らせた。

あれは・・・あれが・・・白鬼（オウゴキ）・・・

「うおおおおおおお。」

顔の表情はよく見えないが、なんとなく喜んでいると感じた。
狂っている。

いや・・・よく考えろ・・・。

大将を潰せば、一気に団結力が弱まるんじゃ・・・。

深く考えている暇はなかった。

それほどまでに不思議とその銀色に近づきたかった。

赤い目が垣間見えた。

血走った目だ。

けれど、なぜかそれは私の心をつかんで話さなかった。

その気持ちをとんとんと言っただろう。

けれど、なにか私の欲しい答えをもっているような気がした。

一瞬だった。

凜はその銀色の青年の前に移動した。

そして、頭を潰そうと額に手をかざした。

握ろうとした瞬間

森のざわめき

川のせせらぎ

生命の声

走馬灯のようになにかが流れ込んだ。

気がつくと青年は前のめりに凜のほうに倒れこんでいた。

殺してない……。

脈があった。

これは……。

そうだ……。

名案が凜の頭の中に浮かんだ。

第2話：白鬼（後書き）

ついに第2部連載です。

頑張って、この物語の解決にむかっていきたいと思います！

第3話：開かれた扉

「おい！！おまえら聞こえてるか！！」

凜はもう眼前に迫っている敵に聞いた。

みな一様に昔の侍の格好をしている。

なかには中国ふうな格好をしているものもいる。

そんなやつらが大将がやられたのに気づいて、うるたえだした。

「無駄な殺生はしたくない！

こいつの命が惜しいなら、身を引け！！」

凜はあらん限りの声をだした。

「大将を返してからだ。」

「ああ、俺がこいつをおまえらのアジトまで連れて行く。

あとで騙されても困るからな。」

おい！！後ろでおやつさんの困ったような声を出した。

お頭も急いで船室からでてきた。

「皆今のうちに逃げて！

俺が止めておくから。」

でも！！

おやつさんが叫んだ。

「おい凜！！」

お頭がものすごい大声で叫んだ。

「お頭！！何もまだ返せてへんけど、今度会ったら、もっといいや

つに成長してるから！！」

「・・・・・・行つて来い・・・・・・。」

お頭は何かを悟ったのか、船室へと凜に背を向けた。

お頭！！

おやつさんがどうしてだと叫んでいる。

「必ず見つけて来い！！お前の答え！！」

お頭は最後に大声で言った。

「・・・お頭！！みんな！！本当に本当に・・・ありがとう！！！」
凜はたくさんの思いをこめて叫んだ。

さあ走り出そう。

扉は近づいた。

あとは鍵を見つけるだけだ。

凜にとっても、そして白鬼の青年にとっても必然の出会いだった。

「・・・妙なガキが白鬼をのしたつてのは本当か・・・？」

「はっ！！ただいま、その者が白鬼を連れて、こちらに向かっていくところでございます！」

男は闇夜に隠れて顔が見えない。

煙草の灰をぽんとすてた。

「・・・それで、お前らは大将をのしたやつを潰しもせず、のこと帰ってきたってわけか・・・。」

使者は怒りに背中を震わした。

「・・・恐れながら、大将の命を守るためでもございますゆえ・・・。」

「もういい。戻れ。次の作戦を練る。」

「はっ。」

一瞬にして使者は部屋をでた。

「・・・白鬼の命を優先だと？・・・戯言を。」

はっと嘲るように男はわらった。

短髪に長身、顔は恐ろしいほど綺麗だ。

「お前達が白鬼の死を望んでる事なんぞはつきりとわかっているわ。」
はっと鼻で笑った。

第3話：開かれた扉（後書き）

ついにお頭たちとお別れです。

凜が次に向かうところ、果たしてその先に地球を約束を守る術はあるのでしょうか？

第2話：必ず助けます。

重い……

青年よりは幼い顔立ちのようだ。

少年だった。

少年は銀色の鎧をつけている。

弦走《身体つるはしの胴の部分を覆う鎧》のせいか力で持ち上げてもなんとなく重かった。

死んだように眠りこけている。

「……はずしてもらいたいなあ……」

ぽそつと呟いた。

今凜たちは森の奥を敵方のアジトへと向かっている。

「ここだ。降ろしてもらおう。」

後ろからついてきていた兵士がそういつて、凜に背負われている少年に手をかけようとした。

「……ごめん……。この人の髪がひっかかって降ろせへんねんけど……」

冷や汗がたらりと凜の背中をつたいおちた。

ここで、この人を手放せば確実に殺される。

幸いこの人は一本括りのポニーテール、なんかにひっかかって降ろせないと言いつけが出来る。

「むう……。しかし……」

「おい。」

どうしようか兵士が考えあぐねていると、若い男の声がした。

振り向いて前を見ると、なんだかおっかなそうな人がいた。

長身で短髪、しかし形相が怖い。

綺麗な人ではあるけれど……

「そのまま運んでもらえ。そいつの寢床は、ここを奥に行つて突きあたりだ」

「高永！！」

「いいから運んでもらえ」

有無を言わず、高永と呼ばれた人物は去つていった。

凜はぽかんとその様子を見ながら、兵士に「早く行け」と急かされ動いた。

少年は白いはちまきをつけている。

使い込まれているのかぼろぼろだ。

髪をくくつたまま寝かされたので、寝苦しそうにしている。

仕方ないので、凜は髪をといてあげた。

着ていた鎧もついてきた兵士の人と一緒にはずした。

服をかえる時はさすがに自分が女だということを思い出して、はばかりれたが、兵士の人に手伝ってくれと言われて、断れずに手伝った。

上だけをかえたのでほつとしたが。

兵士の人は油断なく凜を見張っている。

他の大勢の兵士達は違つところで待機しているらしい。

「あの・・・」

兵士の人はぎろつと凜を睨んだ。

そんな、あからさまに・・・

凜は少し困つた顔をした。

「さっきの人は誰ですか？」

「・・・我らが天守を守る八人衆の一人、高永たかなが 武人たけとだ。」

兵士の人は案外丁寧に説明してくれた。

「俺が助けたこの人は誰ですか？」

「同じく八人衆の一人、塩尻しおなぎ 銀狼ぎんろうだ。」

「あの・・・あなたは誰ですか？」

よく喋るな・・・自分

そう凜は苦笑した。

よくこんな命の危機かもしれないときに自己紹介などできるものだ。

「お主から初めに名乗ってもらおう。」

「俺は日野 凜汰ひの りんたです。」

「そうか。俺は春日 時かすが ときだ。」

そうして訝しそうに俺を見てきた。

「お主、名字を持っているとは、身分の高いものか？」

それとも西李壇のものか？」

どうやら西李壇の人は誰でも名字を持っているが、紀陽の人たちは身分の高いものしかもっていないようだ。

「どちらでもありません」

と凜は言った。

春日さんはさらに訝しそうに凜を見た。

凜は慌てて「どちらかわからないんです。」と付け加えた。

「して、なぜ我々についてきた。」

と聞いた。

「・・・あなたがたに着いてきたんじゃないありません。」

俺は、この人を助けようと思ったんです。」

凜は少年のほうを向いた。

「助けるとはいかようなことか？」

凜は静にその少年の額に手をのせた。

さっきのようなよくわからないものが流れてくる事はなかった。

しかし、精神とでもいうものだろうか？

そついう波動のようなものが感じられる。

さらに、少年の波動がおかしいということもわかった。

「この人の精神はすこし、壊れ気味です。」

俺はたぶんこの人を治してあげられると思います。」

少年はいまだ目を覚まさない。

「そうか。ではお主が銀狼を治せるかどうか見極めよう。」

春日さんは額から手をはなした凜にそう言った。

「必ず助けます。」

第5話：狂気（前書き）

少し、残酷な表現が出てきます。
苦手な方はこの話をとばしてください。

第5話：狂気

おかしくなったのはいつごろだろう。

俺達は同じ穴のむじなだと思っていた。

でも、あれを見て同じとは言いがたくなったんだ。

「塩尻殿のところの軍隊に急遽、奇襲が！！」

「真か！？今すぐ、こちらから援軍を送ろう！」

「はっ！！」

使者が見てきた有様は、それは酷いものだった。

着いていった俺もそれを見た。

敵方の死体もたくさんあったが、味方のほうもたくさん倒れていた。俺達は苦い思いを噛み締めながら、生きているものがないかと辺りを探った。

そして、林をでたところで見てしまった。

たくさんのおびただしい血を浴びた銀狼を・・・

その中で、狂った獣のごとく喜んでいた銀狼を・・・

「血をちょうだい・・・」

もつとちょうだい・・・」

そう言いながら、もうすでに虫の息の敵の腸を抉り出す。

真っ赤な鮮血がまたあたり一面に飛び交った。

何が起こっているのか俺達には一瞬理解できなかった。

銀狼の周りにはたくさん敵が無残な殺され方をしている。たしかにあいつは強い。

だが、ここまで酷い殺し方をするやつじゃなかったはずだ。
むしろ、心根の優しいやつだ。

銀狼に近づこうとしたが、俺と一緒に来ていた使者がすでに腰が抜けて動けなくなっていた。

そのとき、もう一人生きているやつがいることに気づいた。

「おいっ何があつたんだ。」

「……鬼だ……。」

そいつは血だらけだったが、外傷はあさく、たいした怪我はなかった。

だが、うわ言のように鬼を繰り返す。

「……白鬼だ。あいつは血を欲しがっている。」

そこまで言つて、気を失った。

やつと気づいたのか、銀狼がこっちをむいた。

「なんだ……。来てたのか。」

時も飲む？」

そう言つて、赤い血を手にくっつけて差し出してきた。

俺はそこで思い出した。

確か、こいつは幼い頃、師匠に会うまでずっと迫害されつづけていたのだ。

このところの激しい戦のせいで精神がいつちまったのか……？

「銀狼。そんなものはうまくない。」

お前はそんなやつじゃないはずだ！」

俺は自分よりすこし小さな肩をしっかりとつかんだ。

こいつは幼い頃、ろくに食べ物も食ってなかったせいで俺達より小さい。

「俺はずっと、こういうやつだよ。」

俺は鬼だから……。血が好きで当たり前なんだよ……。」「
にへらつと不気味な笑みを浮かべる。

「違う！！お前は鬼なんかじゃない！！師匠もそう言^さって諭^{さと}しただ
ろう……？」

「師匠……？」

「……お前！！まさか！？……師匠を忘れたのか？」

突然銀狼を銀色の髪をかきむしりはじめた。

「違う……俺は違う……。」

俺はそんな様子の銀狼に何も言えなかった。

いや何を言ったらいいのかわからなかった。

あとから、やってきた高永達とともにやっと俺達は血溜まりから抜
け出した。

こいつはそれを知っているのだろうか……？

突然あらわれた銀狼と同じだが、違う白髪の少年。

小柄なあたり銀狼と似ている。

こいつに銀狼を治せるのか？

長年友人だった俺達に治せないものが見ず知らずのこいつに治せる
と思うといらいらした。

ためしに聞いてみた。

なぜ助けたいのか……？

「わかりません……。」

でも、この人が俺の探している答えをもっているはずです。」

少年は何かを探しているらしい。

はて、この少年が銀狼に関わりをもっていたことなど聞いたことが
ないが……。

それとも過去に関連することか……？

時は少年が確実に寝たと確認するまで、ずっと考え続けた。

第6話：悠久の闇にとる光

「あの童は寝たのか？」

「ああ、まったく警戒もせずにな。」

「敵方の偵察かと思っていたが、違うか・・・？」

「今のところはわからん。だが警戒は怠らんほうがいい。」

そこで、高永は酒を一杯あおいだ。

「・・・嘘をつくのは苦手だったんじゃないのか？」

八人衆だとはばれてねえんだろ？」

「聞かれたわけではない。」

だから、答えなかった。

嘘をついたわけではないだろう？」

春日がにやりと笑った。

「お前が偵察をするのは不向きだと思っていたんだがな。」

高永も愉快そうに顔を歪めた。

だあれ・・・

だあれ・・・

後ろを振り向いても誰もいない。

前を振り向いても誰もいない。

そのうちに鮮血でまみれ、自分を溺れさせていく。

正気でいさせられなくなる。

やはり自分は戦いには不向きだったのか・・・？

でも守らなければいけないものがたくさんある。

そして、あだ討ちも・・・。

なら、鬼になることを戸惑うものか。
鬼といわれたのならば、真の鬼となってみせよう。

『鬼といわれたん？』

誰・・・？

己以外に誰もいるはずのなかった世界
そこには見たこともない人がいた。

長い漆黒の髪を風にゆらし、たっている。

「君、誰？」

今まで、ここには誰もいなかったのだ。
不審に思わないはずがない。

『私の名前は日野 凜。』

「日野・・・凜・・・。」

『あんたは鬼なん？』

「ああ。俺は鬼。傷つける事でしか守ることの出来ない、破壊の鬼・
・・・」

『そう・・・。』

少女はふと何かあるように自分の隣をみた。
もう一度そこを見ると、桜がたっていた。
俺は目をこすって、もう一度見た。

確かに今まで何もなかった場所に桜の木がたっている。

第7話：桜と青い空

『私も・・・下手したら、傷つけても守れないかもしれない・・・
化け物。』

それから、『守るものなんて今のところはないねんけどな。』
と苦笑した。

「化け物・・・？」

『私は化け物。あんたは鬼。どう？結構仲良くなれそうちゃう？』
いやいや、普通なれなさそうだろ？

と心の中でつつこんだ。

『お家はどこ？』

まるで、俺のほうが年下のように接してくる。

みたところそいつのほうが年下のように思えるのだが。

「俺は年上だとおもうが・・・。」

素直に思ったことを口にだしてみた。

『え〜、絶対あたしのほうが年上やでえ。』

腕を組んで俺を見下ろすようにした。

おかしい、さっきまでそんな僅差のない背だったはずだ。

ふと足元をみるとつま先立ちをしている。

「せこいぞ！！」

いらつとして俺もつま先だちしてみた。

『じゃあ、年いくつか言ってみい。』

「17。」

簡潔に答えた。

すると、罰が悪そうに少女はぐつと詰まった。

はっ、その様子だと俺より年下だな。

『あんまりチビやから、勘違いされんねん！！』

逆切れかい・・・。

『とりあえず、帰るところはどこ？』

「ねえよ。」

俺はないはずの空を見上げた。

驚いた。

いつもなかったのだ。

この空間に空など……。

でも、今は真っ青な空が広がっている。

ぽかんと空を見つめた。

『何、ぽかんとしてんねん。

帰る場所はあるはずやで。』

そう言つて、少女は手をさしだしてきた。

『帰ろう。』

少女は言つた。

でも、俺はその手をとれなかった。

身体が動けなかった。

『まだ……無理やな……。』

少女は少し、悲しそうな表情をしながら言つた。

『待ってるわ。目覚ますのん。』

そう言つて、俺に青い空と桜を残し、消えていった。

第7話：桜と青い空（後書き）

長い事、更新停滞しておりました。

実は、最終部分はきまっていたのですが、途中部分があやふやなところができて、もう一度考え直しておりました。

どうにか、少しずつできてきたので、またゆっくりと更新していきますと思います。

第8話：迷宮

がたっ

びくつと凜は身体を震わせた。

いつのまにか眠っていたようだ。

いけない。

油断していたら、いつ殺されてしまうか……。

それにしても不思議な夢だった。

凜はねぼけている頭を必死でフル回転しながら、夢の内容を反芻しようとした。

少……青年がでてきて……名前は銀狼……。

目の前で寝てる人……？

私……どうやってこの人と話してんのさぁ……。

それとも……やっぱりただの夢？

ぼおつと己の手の平を見続けた。

青年の瞳はまだ固く閉じられている。

「ねえ銀狼。あんた、私と話したん？」

もう一度手を銀狼の額にかざしながら、問うた。

青年が答えることはなかった。

「どう思う？」

「あやしいところは今のところはない。」

二日とたったところ、春日と高永は話し合っていた。

「しつぽがでねえのは危険だ。」

「というよりも、やはり何の関係もないのではないか？」

「……日野とかいったか……？あいつの監視はまだつづける。」

情を移すなよ、春日。

お前は時に騙されやすいからな。」

「ふん。」

春日はその場を出て行った。

「試してみるか。」

出て行った方向を見ながら、高永がにやりと笑った。

「あつ、春日さん。いらっしゃったんですか。」

「どうだ。」

「まだ、目を覚ます気配はありませんけど、顔色はよくなっています。」

凜は銀狼の顔を確認した。

最初は真つ青だった顔は今ではだいぶ血色がよくなっている。

苦渋にみちた表情もうつすら和らいだ。

逆に凜のほうは二日間の力の操作に、少し体調をくずしかけていた。頭はぐらぐらするし、手もこころなしか震えている。

しかし、このぐらいなら、まだ我慢できた。

「顔色が悪いようだが、大丈夫か？」

「大丈夫です。顔色も薄暗くなっているから、悪く見えるだけでしょう。」

「そうか・・・折り入って頼みたい事があるのだが。」

「・・・なんですか？」

凜は首をかしげた。

「今度の警護の件でな。本来ならば銀狼にこの仕事をやってもらうつもりだったのだが、この様子ではまだ目を覚まさんだろうし。目を覚ましても万全の状態ではない。それで、お前・・・戦力はあるのかな？」

「はい。」

「なら、警護の件、引き受けてはくれまいか。」

「分かりました。」

こりゃあ、銀狼が目を覚ますまで更に大変になりそうだ。

春日はその返事を聞くと、さっさと部屋を出た。

また、二人だけになってしまった部屋で凜は静に溜息をついた。

前途多難だ。

もう後戻りはできない。

かといって銀狼が目を覚ました後、どうするかも漠然としている。

凜の思考は迷宮入りしはじめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3622g/>

約束2 ～ 白鬼の世界 ～

2010年10月9日16時45分発行